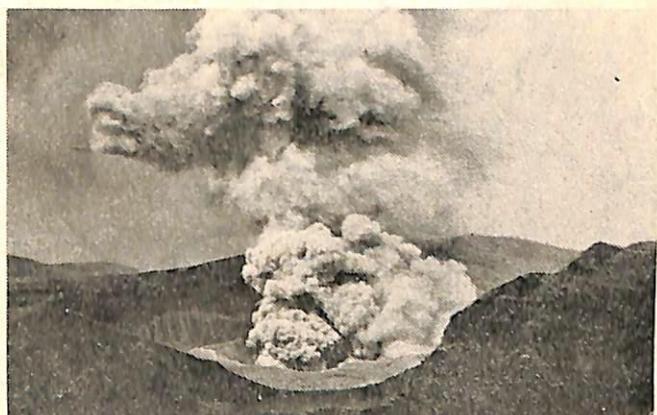


この公園は熊本、大分兩県に跨がる世界的大カルデラ内の活火
山阿蘇と、九州本土の最高峰久住山を中心とする九重火山群とを
包含している。公園区域の南半を占めている阿蘇は地球上稀に目
る大火山で、有史以来全く噴煙の絶

公園区域は南九州球磨山塊と福岡北部となるべき筑紫山塊とを隔離していた海中にあつたもので、第四紀の中頃に九重・由布・鶴見等と共に阿蘇山の様な大火山の爆発によつて始めて此等南北両側塊が完全に結合統一され、現在

えたことがないという実に本邦火山中最も活動力の旺盛な山で、其の中心は中岳の噴火口である。大活動の際は噴煙は天を被つて暗黒となり、多量の火山灰降下は夕立のようである。延々一二八秆に亘る外輪山は其の外側に広大な裾野を開け、所謂波野が原は丘陵の波瀾を意味し、狭い日本に於いては最も雄大な景観である。阿蘇の地学景観の特徴は雄大壯麗な山容を持つた複式火山地形といえるが、その地学的構成を知るには、成生前の模様を知る必要がある。

代には勿論海没を受け、少くとも中央構造線の延長である大分—八代線と松山—伊万里線とが挟む長崎三角地帯は、多数の不連続陥没地帯である瀬戸内海の延長として海底にあり、有明海と連絡していたものと考えられる。当時此の国立



中岳の噴煙 阿蘇の大カルデラの中には、5つの中央火口丘があつて、阿蘇五岳と称せられている。現在旺盛に活動しているのはこの中岳で、大活動に際しては噴煙が空を被うて暗黒となり、多量の火山灰（ヨナ）が降下する。火口は周囲4耕、深さ150米に達しているが、更にの中にいくつもの小火口が出来て、これ等がかかるがわる轟々と鳴動して噴出する。

る。外輪山は万里の長城の様に海拔八〇〇—九〇〇米級の山が続いており、其の内側の火口原には現在三ヶ町、十一ヶ村、人口約五〇米に達し数ヶ所から交互に轟々たる鳴動を起して噴煙天に沖している。中岳の火口は周囲四糠、深さ一メートルで、その中に噴出する阿蘇沼は、大が噴出する。

五万の人々が居住しているのである。処が此の火口原もカルデラ湖であつたらしく、現在の阿蘇五岳も恐らくはその湖面に突出した島として存在していたであろう。此のカルデラ湖水は後になつて外輪山の西方立野から流出し、白川となつて排水され、湖面は涸渴したのである。現在は阿蘇五岳を中心として此の火口原を南北に両分し、北部は阿蘇谷、南部は南郷谷と称せられ、夫々黒川・白川が貫流している。阿蘇谷・南郷谷の両盆地を縁る南・北外輪山は阿蘇七鼻等と称せられる多くの展望地点を有し、朝霧に浮ぶ五岳又は夕映えに噴煙を棚引かせる五岳等、変化に富む眺望を悉にすることが出来る。北外輪山の西麓に源を発している深葉溪谷は深淵・急湍・瀑布等を隨所にもち、阿蘇に於ける唯一の水景を呈している。

区域の北半を占めている九重火山群は、久住山をはじめ星生山・三俣山・大船山等の高峰を包含する大高原地帯であるが、ここを分布の南限とするコケモモ・イワカガミ等の高山植物を有し、黒岳・清水山等の原生林・雄大な飯田・久住両高原の草原と相俟つて、独特的の山岳風景を呈している。

前述の様に阿蘇地帯と九重地帯とは風景型式を異にしているので、これら両地帯を分けて観察しよう。

阿蘇地帯

阿蘇火山の雄大性は地形に現われているばかりではなく、この火山の噴出物である阿蘇熔岩は他に類例のない特別のものであるが、分布が極めて広く、東は豊後水道、西は天草島に及び、南は

人吉盆地から北は遠賀川渓谷に至り、かつては九州の三分の二を被っていたと思われるほどの實に驚くべきことで、その大部分が侵蝕し去られた今日でも、なお九州の地形と景觀とに種々の特色を与えてるのである。また熔岩の種類から云つても九重火山とは異なり、輝石安山岩のみで角閃安山岩は一つも出ていない。これが九重（山陰火山帶）と火山帶を異にしている理由でもある。阿蘇は從来瀬戸内火山帶の延長のよう云われていたが、火山型式や熔岩の種類から云つて寧ろ霧島・桜島から琉球の西側に続いている所謂霧島火山帶に加えられるべきである。兎に角阿蘇は火山帶から云つても山陰・瀬戸内・霧島の三火山帶の交叉点近くにあるので、独特の大スケールの火山が出来たわけである。

次にその主要景觀を略記しよう。

中央火口丘——前述の阿蘇五岳のほか橋尾岳・往生岳・千里ガ浜火山・御籠門山・夜峰等を合せて十にも達し、更に爆発火口や寄生火山（米塚のような標式的碎屑火山を含む）らしいものが六つか七つある。

中央火口丘の最も東に位し、外輪山の障壁を破つて噴起した根子岳（一、四三三メートル）は七面山とも呼ばれ、阿蘇群山中第三の高峰である。その山嶺は錐状に錯立し、山体は熔岩及び集塊岩の累層から成り、中央部から四方へ放射し、上半の傾斜は峻峻であるが下半は緩やかな山麓を形成している。南北両側に四ヶ所の深い谷が出来、山壁は削つた様に侵蝕されて奇景を呈している。高岳（一、五九二メートル）は根子岳の西に接し、阿蘇諸山

中第一の高峰で、頂上の橢円形の火口は東西約四〇〇米、南北約一〇〇米余、火口壁は南東部の一部が爆裂によつて欠損し急峻な深谷となつてゐるが、他は十数米の火口壁に囲まれ、火口底は高岳千里方浜と称される平坦地となつてゐる。中岳は高岳の南西麓に噴起したもので頂上は一、五〇〇米を越え、噴火口は一、三〇〇米の標高を有し、南東から北西に伸びた狭長な瓢箪形の大噴火口があつて、現に噴煙蒙々として盛に活動している。火口壁は何れも絶壁を形成して北東一帯は高く錐歯状を呈し、西方一帯は稍々低く平になつてゐる。周囲約四糠、火口内には水蒸氣を噴出するもの、或は熱湯を湛えたもの等、時々活動の状況を変化する八個の噴火口がある。

烏帽子岳（一、三三七米）は風化水蝕の作用を受け山体は頗る崩壊して頂上の火口は消失している。北麓には俗に草千里方浜と称する爆裂火口跡があり、直径約一糠に近い大草原であつて、夏期放牧される牛馬の点々と散在する風景は阿蘇特有のものである。

杵島岳は烏帽子岳の山腹を破つて噴起したもので往生岳と並び円錐形の端麗な山である。

北外輪山—阿蘇谷北部をめぐつてその外壁となり、内側は断崖を形成し、外側は広漠とした原野である。象が鼻・遠見が鼻等七つの山嘴を阿蘇七鼻と呼び、中でも遠見が鼻は阿蘇五岳の展望地点として随一のものである。

南外輪山—南郷谷の南壁をなすもので、東部根子岳から立野に

延びて半円を描く山嶺は集塊岩から成り、奇巖が錯綜して南画的風景を呈し、北外輪山とは全く趣きを異にしている。外輪山中の清榮山・御成山・冠岳等は優秀な展望地点で、又羅漢岩・虎御前は風蝕による奇怪な岩峰で知られる。西端戸下・柄木温泉の南に聳立する北向山は全山広葉樹の天然林に被われ、新緑・紅葉共に見事である。

深葉渓谷—北外輪山西部に源を発する菊池川水源一帯の渓谷である。隈府（区域外）から入れば念仏橋附近から渓谷は次第に趣を添え、広瀬に至る間、竜ガ淵・黍明滝・紅葉が瀬・四十八万滝等の深淵・急流・瀑布が連なり、沿岸一体は広葉樹林に被われ、特に新緑・紅葉の候は阿蘇に於ける唯一の水景として、魅力がある。

鞍岳—北外輪山西側にある丘陵状の山で、遠望すれば鞍に似てゐる所からこの名がある。阿蘇火山以前の火山で、ミヤマキリシマの群落がある。

この地帯の温泉は次の六ヶ所が著名である。

柄木—白川の清流に沿う山峠の中腹にあつて前面に北向山の天然林が眺められ、泉質は無色透明の塩類泉（古湯）含鉄明礬泉（祖音湯）並に石膏泉（平湯）等である。

戸下—白川と黒川との合流した渓谷内にあつたが泉質は塩類泉で、柄木温泉の熱湯を引用している。

湯の谷—草千里方浜の下方海拔八二〇米の高所にあつたが柄木原を見下し、立野火口瀬・熊本平野を隔てゝ雲仙を望む絶好の位

ホフショウウ
星 生



九重山塊 九州に於ける最高峯久住山(1,787米)を主峯とし、星生

山・三俣山・大船山等の高峰を包含している九重山塊は阿蘇国立公園の北部地帯を占めている。この写真は飯田高原から久住山・三俣山等を遠望したもので、山陰火山系の角閃安山岩からなるトロイデ景観である。

内牧—阿蘇谷遠見が鼻の西麓にあつて、北部盆地内唯一の温泉場である。泉質は炭酸アルカリ泉。

九重地帯

九重火山は熔岩の種類や構成は阿蘇と異なるが、成立は殆ど同時代である。しかしこの地帯の中では成立の新古に従つて三段階に分けられる。最初は最も西方の涌蓋(ウツカシ)・一目(イチモク)の二火山で輝石安山岩を噴出し、次に花車礼山・鍋山・鏡山等の小火山が輝石安山岩や角閃安山岩の熔岩を流した。第三次に両火山群の中間に噴出したのが九重火山群そのものであつて、これは中央の久住山・東方の大船山・西方の黒岩山の三区域に分れ、角閃安山岩の三トロイデからなる黒岩火山が最も古い。中央の久住火山と東方の大船火山とはトロイデやコニーイデの集合で大九重山火山の主腦部である。次にこれ等の主要景観を略記しよう。

久住山(一、七八七米)——九州本土の最高峰で角閃安山岩のトロイデとなつてゐるが、北の天狗が城との間に御池・馬洗が池・空池と称する三火口を有している。コケモモやマンネンスギ・イワカガミ等の高山植物が珍らしい。北麓に千里ガ浜と云う大火口があり、その北に三俣山が聳立している。この山は中央火山と外輪山とを有する複式コニーイデで、その成立は久住火山群中最も新しいものであり、その北方山麓に湯次の熔岩原を有する。

大船山(一、七八七米)久住火山群の東にあつて南方からの大觀が殊に偉大である。この山も角閃安山岩の大トロイデである。地獄—夜峰の北側垂玉に近接してゐる。爆裂火口から湧出した二湯を引湯している。海拔七一〇米泉質は明礬泉。

置にある。泉質は含鉄明礬泉。

垂玉—鳥帽子岳南西麓にあつて海拔六七〇米、泉質は硫黃泉と

含鉄酸泉。

地獄—夜峰の北側垂玉に近接してゐる。爆裂火口から湧出した二湯を引湯している。海拔七一〇米泉質は明礬泉。

が、頂上には米窪と称する火口がある。この山の北には最も新しく噴出した平治岳があつて、北方飯田高原に向つて長い裾野を曳いている。

黒岳一大船山の東隣にあつて怪異な山容から俗にお面山と称するが、大船山と同時代に噴出したトロイデである。全山うつそ

うとした広葉林で被われ、頂上に火口らしい窪みがある。

一般に九重火山群の熔岩は輝石安山岩から始まつて含角閃輝石安山岩となり、次に角閃安山岩最後に再び輝石安山岩へ戻るといふ岩漿輪廻を示している。この中噴出量の最も多いのは角閃安山岩でその性質が堅い割に割目が多いので崩れ易い。これが九重火山群に断崖・絶壁・峡谷の多い理由で、阿蘇山とは全く異なるところである。

九重火山は一部を除いてブナを主木とする針広混交林で被われ、殊に黒岳がその名の示すように密林で異彩を放つている。ブナ林の下にはツクシシャクナゲの群落がある。又山麓には南に久住高原、北に飯田高原があつて牧野景観を呈している。なおこの地帯の主要温泉は次の通りである。

法華院温泉—三俣山麓にあつて標高一、三〇三メートルに於ける最高の温泉である。

寒の地獄冷泉—星生山北麓に位する冷泉であつて附近に中野・星生の二温泉がある。

筋湯温泉—黒岩山西麓に当り玖珠川上流の溪流を挟んで湧出する塩類泉である。

阿蘇の火口原がまだ一部は火口湖の頭からだつたらうか、それとも決済して火口原となつてからであつたろうか、いづれにしても外輪山に囲まれた火口原の地形は古代人にとっては占拠に最適の地形であつた。調査が充分ではないが火口原から採取された石鐵や石匙はアイヌ系統のものであり、石庖丁は石器時代の我々の祖先のものとみられているので、所謂阿蘇盆地は阿蘇の噴煙を仰ぎ乍ら古くから人間の定住を許したものといつてよい。山上の噴火に神靈を肯定した原始信仰は、やがて山上の社殿の創建となり、後には阿蘇開発の阿蘇族の祖先である健磐竜命を祀る宮地の阿蘇神社と合流した形になり、山上も健磐竜命を祭神とするようになつた。

阿蘇山の記事は遠く支那の隋書に載つてゐる。隋書は唐の太宗の勅を奉じて貞觀十年になつたもので、舒明天皇の八年に相当するから、古事記より七十六年、書紀より八十四年前の文献で、恐らく我国の山が文献に録された最古のものであろう。山石は故なくして火を発して天に沖するとあるので阿蘇の噴火は當時既に中國にも著名であつた。同様の記載は李延寿の撰した北史にもあります。下つて明の太宗は永樂四年に阿蘇山を封じて泰安鎮國の山と称した。支那の天子から封を受けたのは阿蘇山だけであるが、この史実には深い興味がある。

阿蘇は人間との交渉がはじまつて以来、特に連綿とした阿蘇家

の存在したところで、旧慣古事、口碑伝説は夥しく、史蹟も亦決してすぐくない。宮地をはじめ、内牧、中通、古城、坂梨、色見、高森、日水、長陽、尾ヶ石等の町村にはいづれも古墳があり、これらを精密に調査すればアイヌ系の文化と日本民族の文化との関連もきわまり、人文発達の姿をつかむこともできよう。頼朝が古式をたづねたという長陽村の下野の狩場は著名であり、この種の史蹟は口碑と共に數多である。今の西巖殿寺は奈良朝の時、僧最榮が創建した山上の口仏堂がそのはじめであると伝えられるが、以来仏寺の建立は各地に起り、一時は修驗道の行場として繁栄したので、仏教関係の遺蹟もすくなくなく、南北朝以後の城廓や古戦場は阿蘇氏の事蹟を語るもので近くは明治十年の西南戦の戦蹟につながつている。

阿蘇は桓武天皇の延暦十五年以来、屢々噴火がくり返されたことが、国史に散見する所であるが、そのたびに朝廷では兵乱又は疾病の兆として祈願したり、阿蘇神社の神階を進めたりされている。九重山火山群一帯は阿蘇火山より古く活動したものであるが、九州本島の最高峰久住山を擁する高山地帯であるから、恐らく阿蘇の火山と同様に古くから人間との交渉がもたれたであろう。久住山の南登山路に沿つて猪鹿狼寺の跡がのこつてある。遠く延暦二十三年(八〇四)伝教大師の開山とされ、文治二年(一一八六)に法華經の中の久住をとり久住山猪鹿狼寺と改名したと伝えられているが、又一説には文治建久の頃、鎌倉幕府が富士の巻

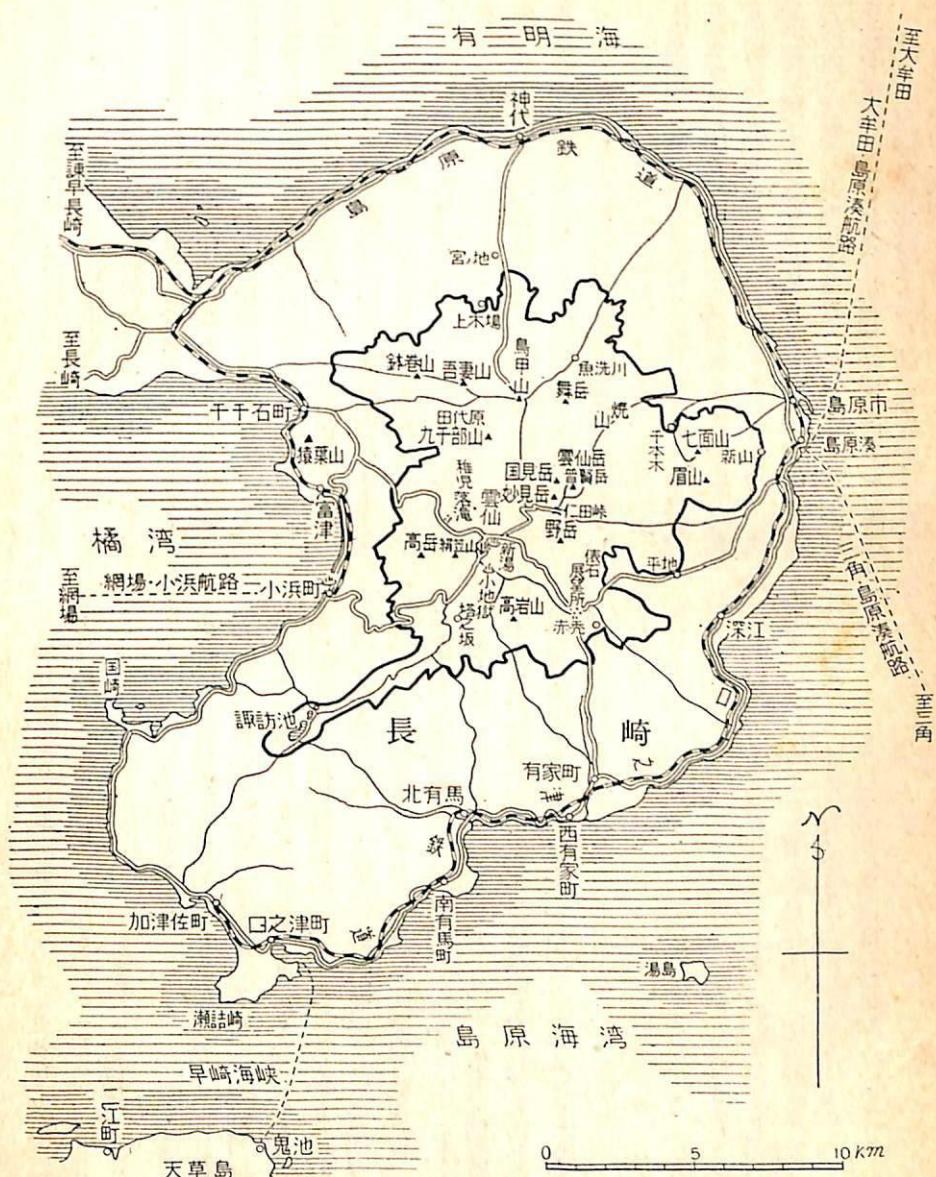
狩のために狩の故実を阿蘇神社にたづねたとき九重の一帯で実験したが、その際獲つた多くの獸のために一寺を建てたものとも伝えている。

この一帯の山名地名は多く經典に因んである点から推して、最初の開拓者は僧侶であつたと考えられる。大船山、三侯山、平治岳の総合には「坊がつる」があるが、「つる」は朝鮮語で原を意味し、坊は法華院があつたためである。ここには法華院白水寺があつた。その創建は文明二年(一四七〇)で盛時には本坊のほかに五つの支坊があつた。現在の法華院温泉はこの高原地帯にあり九州第一の高地の温泉である。そのほか一帯の高原には寒の地獄冷泉、星生温泉、中野温泉、筋湯温泉などがある。これらの温泉の多くは郷土色豊かな建築で特色をもつが、中でも筋湯温泉の建築にはこの地方の特色が生かされて味があつた。しかし先年の火災で全焼してしまつたのは文化景觀のとりかえのつかない損失であつた。

雲仙國立公園

指定 昭和9(1934)年3月16日

面積 13.029 陌



この国立公園は長崎県島原半島の主要部を占めている山陰系の集成火山である。四面環海という特殊な位置にあるため、半島というより寧ろ独立した火山島としての景観を有している。区域には雲仙火山錐の基底である新第三紀層を被りて噴出した玄武岩山地や、その後に噴出した複雑石安山岩山地の丘陵地帯へ突入している諫訪池附近まで編入されてあるが、景観の中核は普賢岳を中心とする野岳・高岩山・九千部山・島申山・吾妻山・鉢巻山と、島原町に近く突出している眉山を含む一帯で、更に区域外ではあるが雲仙岳裾野の輪廓がそのまま海岸線となつている北部や東部と、弧状に陥没した橋瀬の東側断層が雲仙岳西麓を海底に沈めて出来た湾入風景も、この火山島景観に少くことの出来ないものである。

これ等の景観はこの公園一帯の火山成生史を物語つてゐるもので、地形図を見ても容易に知ることが出来るように、その地形解析程度の新旧や地質構造に關係ある渓谷・山稜の走向によつて最も古い絹笠火山地帯、その次に古い九千部火山地帯や、この両者から見ると遙かに新らしくて解析作用も若い普賢火山地帯の三帯に分けて観察される。

この生い立ちの順序は解析の程度や噴出物の重なり具合から推量するので、絹笠火山地帯は現在雲仙温泉の存在する地域が中心部であるが、この侵蝕谷は南方や南西方、西方へ放射して最も解説度が進んでいる。九千部火山は絹笠火山の北半が破壊されたものの上に噴出し、しかも橋瀬北辺から鉢巻山・吾妻山・島申山

方向の東西性大断層が明瞭にこれを中断しているので絹笠火山よりは新しく、この断層成生時よりは古いことを証明している。更に普賢火山はその外輪山として最も古い国見・妙見岳でさえ、前記の断層を被りて噴出しているので、この地帯が最も新しいことがわかる。

雲仙火山は山陰系の日本海に沿う白山・大山・三瓶火山の延長として、北九州では由布・九重等と一緒にをなすものと考えられてゐるが、これ等の中雲仙だけが有史後活動の歴史を有し、明暦三年（一六五七）以後数回の記録があるが、特に最後の寛政四年（一七九二）の大活動はもの凄く、遂に眉山の東半部の大崩壊を起して島原や有明海を距てた対岸熊本県側にまで大津浪を起したものである。

現在の雲仙火山が存在しなかつた第四紀の始には有明海中にこの南島原の部分が島となつていて、最も若い第三紀層上に玄武岩や輝石安山岩が噴出して熔岩台地となつていて。これが雲仙火山噴出の前ぶれでその熔岩は最も塩基性の強い橄欖石玄武岩から始まつたのであるが、後に中性の輝石安山岩となり、最後に酸性の角閃輝石安山岩を噴出しているのは岩漿の輪廻的変遷をよく示している。そしてこの角閃輝石安山岩の噴出が量に於いても又その猛烈さに於いても最も盛んであつて、長い期間に亘つてこの酸性の熔岩が反復噴出されたために妙見岳・国見岳、更に最後の普賢岳の大トロイデ等現在の雲仙大火山が出来たのである。

これ等の山間山腹には草原美に富む田代原・池の原・宝原・論

所原等の高原が拡がり、それぞれ広葉樹林やイヌツゲ・ツツジ類の灌木群に飾られている。又焼山の熔岩流や溪流・瀑布・池沼等の彫刻美も見られるが、殊に南西部の諏訪の池は松林に囲まれた水景で風光明媚と云えよう。普賢岳頂上を始め山上・山腹は到るところ好展望台となつてゐるが、仁田峠の阿蘇・天草諸島の展望は雄大であり、その他四面海洋を距てた多良岳・久住・霧島の遠景も優れている。

次に生い立ちの順に、前述の三地帯によつて観察しよう。

絹笠火山地帯

この地帯は公園区域としては南西部に相当し、雲仙火山群中最初に成生された火山区である。その南辺は橘湾海岸の京泊から諏訪池に出て東に谷に沿い有明海に出る線で境し、北は千々岩から谷を遡り妙見岳西腹に至る線、東は矢岳と高岩山の東麓で割り、西辺は絹笠山の中腹が海岸線の断層で落されているので、実際の山麓は海中に沈んでいるわけである。

絹笠山（八六〇メートル）は紫蘇輝石角閃石安山岩から成つていて、絹笠火山活動末期の寄生火山の一つである。周辺はアカマツ林で被われているが、山頂は美しい草原で眺望が素晴らしい。

矢岳（九四〇メートル）と高岩山（八八〇メートル）は侵食破壊されるが独立火丘であり、矢岳は全山アカマツ・スギ・ヒノキで被われ、高岩山は山腹のツツジが有名である。

別所盆地は爆発火口の一つであり、北側のアカマツ林が美しい。盆地の西端に稚児薺瀧をかけている。

現在雲仙温泉郷となつており多数の硫氣孔が活動している地域は最後の成生で、爆発口に相当する。この間に地獄の名のつくもの三〇余りあるが、シロドウダンは中地獄地帯の温泉湧出箇所上部の松林中に純群落をつくつており、五月頃は美しく開花して雲仙特有の景觀となる。



雲仙とツツジ群落 雲仙の山間・山腹には、草原美に富む田代原・

ホツベ・ロングバル
池の原・寶原・論所原等の高原が拡がり、イヌツゲやツツジの群落で飾られている。殊にこの野岳頂上附近は大群落をなしているが、西山腹の緩いスロープの池の原ゴルフ場辺にはアカマツの点生する中に、ミヤマキリシマの群落があつて、丈も他のツツジより高く、花色の変化にも富んでいるので、五月中旬の開花時は見事である。なお中地獄地帯のシロドウダン純群落や、寶原・高岩山中腹の草原や田代原の静寂な牧場景観等を彩るツツジも美しい。

九千部火山地帯

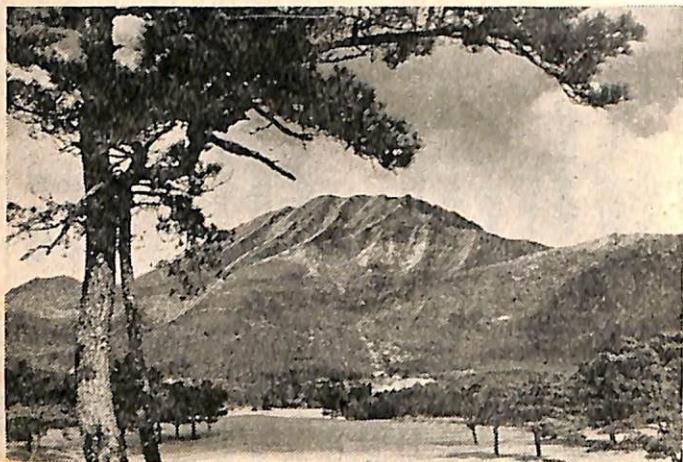
この地帯は雲仙火山群建設第二期の火山活動の結果生じたもので、先ず九千部岳附近を中心とする

火山活動によつて四方に傾斜する火

丘を建設し、次に寄生火丘の噴出と山麓部に於ける扇状地の成生が始ま
り、終に千々岩断層及九千部岳頂上附近を走る東西断層が成生されたの
である。

九千部岳（一、〇六二米）は千々岩断層の南側にあつて、輝石角閃石安山岩から成つているが、山容峻嶮で山頂一帯には峨々とした熔岩が重なつており、山腹にイヌツゲの大群落がある。

吾妻岳（八六八米）鉢巻山（六三八米）鳥甲山（八二二米）等は九千部岳集塊岩上に千々岩断層成生に先立つて噴出したところの夫々独立した火丘であるが、その岩質も黒雲母を混じてゐるので普賢活動期噴出岩への類似を示している、吾妻岳の周辺は原始林で被われ山頂は草地である。



池の原と妙見岳 野岳の西側山腹は、緩傾斜の美しい草原となつてお
り、アカマツが点生している。周囲にはミヤマキリシマの群落が見られ、
5月月中旬の壯観がしのばれる。この辺は9ホールのゴルフ場となり、雲仙火山
群の最高峰普賢岳に連なる。

絹等及九千部火山の活動期には前述のように比較的傾斜の緩やかな大火丘
が生じ、これに多數の小火丘が寄生したものであつたが、普賢火山活動期に入
ると最初から粘稠な熔岩で傾斜の急な
火丘が相次いで成生された。先ずこの
地帯で地形的に最も古い火丘は黒雲母
石英安山岩から成る眉山（八一九米）
であり、これと類似の白い石英安山岩
に稀に橄欖石を含むものが野岳方面の
岩床山（六九七米）に見られ、更に含
一四七米）がその上に聳えている。又
野岳から北方にはこれに次いで噴出し
た、妙見岳（一、三三四米）や国見岳
(一、三四一米)があつて次第に北方
に配列している。

これらの火丘が出来た後に妙見岳と国見岳の東半部が爆破され、その中に噴出したのが雲仙火山群の最高峯である普賢岳(一、

田代原は前記の諸岳を周らした広大な草原であり、アカマツ・ツゲ等が点生する静寂境の牧場景觀を展開しているが、五月のツ
ジが素晴らしい。

普賢火山地帯

三六〇米)である。岩質は赤褐色又は暗灰色の黒雲母角閃石安山岩で頗る急峻な斜面をもつたトロイデであつて、山頂に摺鉢型の小噴火口を有しているが、現在ではその中に灌木類が密生し、秋の紅葉が美しい。山頂附近普賢池一帯には有史後の噴火跡(地獄跡・峰の窪等)が見られ、又古焼中に出来た鳩の穴は熔岩トンネルの上壁が落ちたものである。明暦三年(一六五七)に流出した橄欖石黒雲母角閃石安山岩の新焼も共に深い谷の中を流れ下つたものである。

池の原は野岳の西腹間に緩いスロープとなつている草原でゴルフ場に使用されているが、ここミヤマキリシマの群落は野岳のイヌツゲの群落と共に有名である。冬期の雲仙で著名な霧氷は妙見岳が優れている。

雲仙の歴史は古い。すでに肥前風土記の景行天皇の條にみられる。最も旧い名は「高来^{タカラ}の峯」で、それが雲仙の名のもとである温泉となつたのは、行基菩薩が満明寺を開き、その山号に温泉山と名づけたからである。これがいつのまにか字柄のよい雲仙となつたものとされている。従つて雲仙温泉の利用は我国でも最も古いものの一つといつてよい。明治二十六年に刊行された金井俊行の「温泉案内記」には雲仙が避暑の適地として外人の利用が年を逐うて増加してきた点が記されている。長崎が我國の代表的な国際貿易港になつた頃から雲仙は外人の間で「日本山」として親しまれていた。長崎へ入港する船は海上から最初にみえてくる雲仙

の山々になにか親しみを感じたことであろう。

雲仙温泉は雲仙国立公園の略中央に位しこの公園利用の唯一の拠点である。雲仙温泉は古湯、小地獄、新湯の三つに大別されるが、古湯は約千二百四十年前行基菩薩が、温泉山大乘院満明寺を開いたとき、既にある程度利用されていたものと考へてよい。その後寺院の盛衰と共に古湯にも盛衰があつたが、約二百六十年前(延宝八年)島原城下の一乘院をここに移してからは雲仙温泉も復活して今日に及んだ。小地獄は享保十六年に開かれたとするので約二百年前からであり、新湯は明治十一年に開かれたもので一番新しく現在最も活動している。雲仙には六軒のホテルと十五軒の旅館があり、約二千の收容力をもつてゐる。国立公園の中の宿泊地としては最も完備したもの一つである。

雲仙と島原半島は歴史も古く、伝説も豊かで数々の物語や哀話は公園の利用者の興味をよんでいる。切支丹を邪宗として厳しい禁制を行つた三代将軍家光の頃、長崎の奉行は邪宗徒を雲仙温泉に送り、裸にした上、荒縄で手足を縛り首に岩を結びつけ、硫氣の熱湯が噴出するところに投出し、転宗を迫つたと伝えられる。しかし信仰に徹した信者は五日も十日も苦痛に堪え神の名をよび乍ら昇天したという。元和から寛永に亘つて十数年間数百人の信者が犠牲になつたといわれている。

寛政四年の正月十八日雲仙の中心である普賢岳から一條の火炎があがり、日夜鳴動が続き二月の下旬に島原の背後にある眉山から火炎があがり三月から全山が鳴動して半島一帯に地震が起り日

夜震動をつづけ、遂に四月一日大音響と共に眉山が爆発、山沢は高く噴き出して海上に及び、落下した土は數十の島をつくり、天草の沿岸には津浪を起して四千余人の生命をうばい、島原領の死亡者は一万八千余人、肥後領は四万余人にはんだと記録されている。島原の港に浮ぶ九十九島はこのときの凄絶な歴史の名残である。

霧島公園

指定 昭和9(1934)年3月16日
面積 21.560 町





高千穂峰 標高1,574米の鉢峰と呼ばれる頂上は、天の逆鉢があるの
で有名であるが、地貌としても独特的な景観を呈している。それは火口の中
にトロイデを噴出したために、火口の凹みがなくなり山頂が突出している
からである。西側山腹にある御鉢は、完全な火口をもつコニード火山で、
僅かに噴煙が見られる。

この公園は宮崎・鹿児島の二県に跨がり東西二二・糸南北一八糸
に及ぶ霧島火山群の主要部を占めている。この火山群は高千穂峯
及び韓国岳を主体とする大小二〇以上の各々独立した火山の集合
であつて、雲仙のように一大火山の開拓された集成火山ではない。
この点は日光の火山群と似ているが更にその景観が一そら集約的

であることが、霧島国立公園の特色である。この一団の火山群は
九州中部の阿蘇から霧島・姶良・揖宿等の諸火山を経て、薩南の
川辺諸島から琉球列島の内側に走っている霧島（琉球）火山帯に
属している。この火山帯は輝石安山岩を主要の熔岩とする点が、
雲仙火山の属する山陰火山帯と異なつてゐる。しかもこの火山帯
には阿蘇・霧島のほか桜島・口之永良部島・諫訪之瀬・島島等多
数の活火山が現存している。

以上の特色のために山容 자체も偉大であるが眺望の絶佳なこ
と、森林も原始的なこと、火口湖の典型的で多いこと、温泉も豊
富であること等の諸点から見て、小面積にかゝわらず景観の纏ま
りのよい優れた国立公園である。

この火山群に属している火山の数は全部で二十三座であるが、
これを噴出の時代に従つて新旧の二群に分けると旧期に属するも
のは北から(一)蝦野岳、(二)白鳥山(一、三六三メートル)、(三)白鳥御池、
(四)大浪池、(五)韓国岳(一、七〇〇メートル)、(六)獅子戸岳(一、四二八メートル)、
(七)大幡山、(八)大幡池、(九)夷守岳(一、三四四メートル)、(十)矢岳(一、一
三二メートル)、(十一)竜王岳、(十二)小池、(十三)御池等の十三座であり、新期に
属するものは(十四)飯盛山(区域外)、(十五)甑岳(一、三〇一メートル)、(十六)
動池、(十七)硫黄山、(十八)丸岡山、(十九)新燃鉢(一、四二一メートル)、(二十)中岳、
(二十一)二つ石、(二十二)高千穂峯(一、五七四メートル)、(二十三)御鉢の十座である。
これ等新旧の火山は大体北西から南東に向つて延長二〇糸に亘る
一縦列をしているが、これに直交する横列もある、例えは蝦野・
白鳥御池・甑の三山は北東—南西に横列をしており、韓国岳と大

浪池や、新燃・大幡山・大幡池・丸岡山・夷守岳等の五山も同方面に横列をしている。岳之湯温泉の東に聳える栗野岳や湯之野温泉の西にある鳥帽子岳は他の山々よりは更に古い火山のようである。御池や小池も岩石から見ると鳥帽子岳と同時代らしい。

以上二十三座の火山の中で特に山容の優れているのは高千穂峯と韓国岳とで、前者を東霧島山（東岳）、後者を西霧島山（西岳）と呼んでいる。両者は噴火時代の新旧代表であると共に火山型も相異なる代表である。高千穂峯は火口の中にトロイドを噴出しているために火口の凹みがなくなり、山頂が突出しているに対し、韓国岳は山頂に立派な摺鉢形の火口を有しているのが特色で、前者は有史後も活動の記録がある。

日本の火山中霧島火山群ほど典型的なコニーデ或はホマーテ型火口丘を数多く有している例は他に見られない。殊に火口湖の立派なものを多數見られる点ではこの公園以外にはない。韓国岳山下の大浪池はその中でも王者である。火口は殆ど正円であり、火口壁の直径は約一、一〇〇米、内側は約一七〇米の絶壁となつて、径約七〇〇米の池水面に達する。火口の外側は約二五度の斜角をもつてゐるが、遠望は立派な截頭円錐形である。新燃は東岳と西岳との間にある活火山で、山体は扁平であるが、頂上には大火口があつて口底に小池を有する。高千穂峯の西側山腹にある御鉢も完全な火口を有するコニーデ火山で、火口の深さは一〇〇米に達する。なお白鳥池・不動池・白鳥御池・小池・御池等もまた火口として或は火口湖として立派なものである。

これ等の周囲は概ね植生が立派であるが、山腹山麓一帯は温暖多雨に基因して昼なお暗いほど常緑広葉樹（タブノキ・カシ・シイ・クス等）が繁茂し、蔓性植物も多く、暖帯林相を呈している。殊に高千穂峯一帯・白鳥温泉附近の森林は見事である、韓国岳一帯中腹以上はモミ・アカマツを中心とした森林となり、登るに従い



大浪池 韩国岳から見下ろした大浪池である。火口湖として全く標式的で、火口壁の直径は1,100米あるが、その内側は殆んど絶壁となつて池の面に達している。池は略々正円の外周をもち直徑約700米ある。火口の外側は約25度の斜角で、截頭円錐形の外貌を呈し、周辺は鬱蒼とした常緑広葉樹の原始林である。

漸次温帯林の特徴を現わし、カシワが大面積に亘つて自生しているが、恐らくこれは分布の南限であろう。次いで山頂部は広大な原野景觀であるが、有名なミヤマキリシマはこの原野中に大群落となつて、新燃・中岳を中心として広く分布している。五六月頃の花期には華麗な景觀を誇るが、大部分国有保護林であつて、林内にはホトトギスやブツボウソウ等の特色ある鳥類の鳴声も聞かれる。殊にブツボウソウは霧島全山に棲息しているが、主として狭野神社内の杉並木に造巣するものを天然記念物に指定されている。なお天然記念物としては狭野神社の杉並木や蝦野附近の野生海宴も指定され、霧島連山の最西峯栗野岳の中腹に彼岸桜が四〇陌に及んで自生しているが、これはヒガンザクラの自生南限地として指定されている。

又この公園には所謂霧島温泉地帯・湯之野・新湯・手洗・岳の湯・白鳥・蝦野等多数の温泉が湧出している。これ等の中心地として霧島温泉は霧島火山帶の中腹海拔七六〇米以上の高所にある林田・明礬・硫黄谷・丸尾・朱之尾等二〇有余箇所の温泉の総称で湧出量の豊富なことは驚くばかりであるが、又泉質も硫黄泉・明礬泉・含鉄硫黄泉・塩類泉等多種多様である。温度は朱之尾で四七一五四度、硫黄谷温泉で六一度である。

霧島は二十三座の火山の集合しためずらしい地形であるが、霧島の名が記録にみられるのは、平安朝の初期、続日本後記で比較的新しいことである。しかもそれは神代の記事としてみられるの

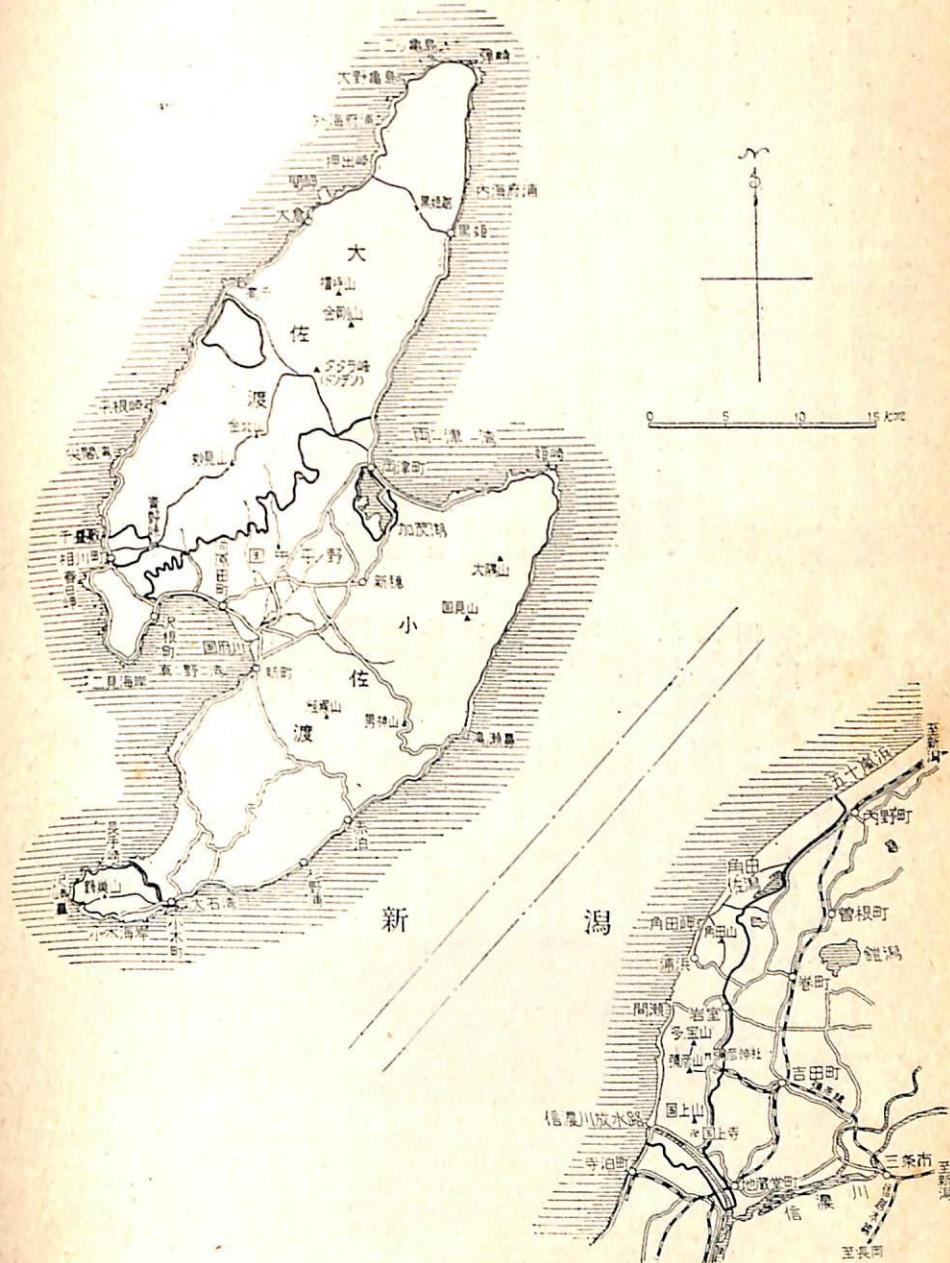
であるが、霧島零神社とある点から既に山名として霧島の名があつたといつてよい。南国の大暖氣は湿氣が多く常に濃霧につゝまれる。都城方面では古来から霧海とか虚海カクハイと呼んでいた。三国名勝図会では霧海の上に霧島の群山が山頂を出す姿は海上の島嶼に似るところから霧島の名が出たものと論じている。

現在霧島の名は国立公園の広い範囲を指し一帯の山彙を含むが、最初に霧島とよばれたのは高千穂峯である。高千穂峯は天孫降臨の地として山頂の天の逆鉾と共に古来から著名である。天孫降臨の地として霧島の高千穂峯に對抗して日向の西臼杵郡の高千穂説があり、本居宣長は両説を共に認めたが、先年迄両説の論争は激しく未解決のまゝ放置された形である。天の逆鉾は伝説では大己貴命が国土平定に用いたものを瓊々杵尊に奉つたもので、天孫降臨の際立てられたものとされている。しかし乍らこれには沢山の異説があり、この鉾は比較的近世の作であるとする説もある。

霧島には瓊々杵尊を祀る霧島神宮をはじめ狹野神社、御池の西北に近い霧島東神社があり、狹野神社の西方約一杆の皇子原は神武天皇御降誕地と伝えられている。霧島の山彙を中心としては山間山麓の各地に温泉があり、霧島温泉と総称される林田・硫黄谷、朱之尾、丸尾、栗川、殿湯などの温泉をはじめ、湯之野、新湯、手洗、栗野岳、白鳥、蝦野の温泉があり古来から利用されている。

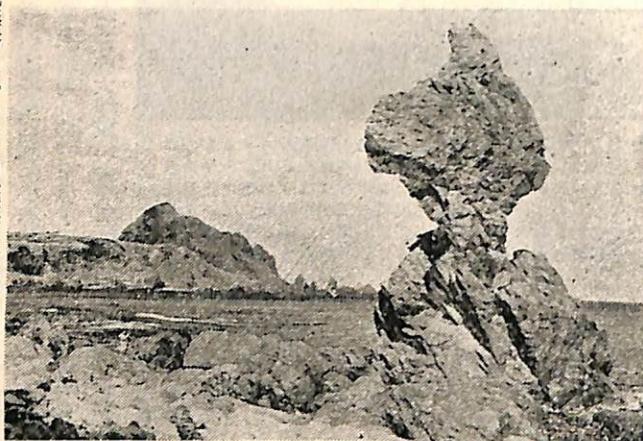
佐渡彌彦國定公園

指定 昭和25(1950)年7月27日
面積 46,030頃



この公園は新潟県の海上約三〇糠にある佐渡島と、これに対す
る彌彦地区を含む一帯で、その区域は佐渡島では大佐渡の大部分
と、小佐渡の南西端部（小木港の西方突出部）と、国中平野の北
東部両津湾にのぞむ加茂湖附近と
であり、彌彦地方では佐渡に面し
た日本海海岸の新信濃川の河口か
ら彌彦山や角田山を含み、砂丘地
帯の角田浜から五十嵐浜に至るま
での一帯である。

佐渡は地体構造の上から云うと
能登半島に似ており、その延長と
考えられる並行地壘島で、侵蝕の
程度は幼年期を示している。植物
は寒暖両海流がこの近海で出合う
ので、豊富な種類をもつと共に、
分布も寒暖両要素が混交して複雑
である。彌彦地方も地壘の構造山
地で生物も佐渡地方と似ている。
佐渡の地貌は南西から北東にの
びる南北二列の並行した地壘的山
地と、その中間に有る国中平野の地溝帶とからなり、基盤は古生
層とそれを貫く花崗岩であるが、現在露われている最も主なも
のは、相川層群を主体とする第三紀層と、その中に貫入或は噴出



外海府海岸

大佐渡の北西海岸は押出岬附近を境として、南北地縫線で貫入したものが少くない。彌彦山附近では黒色頁岩の大段丘層中に玢岩が幾枚も岩床となつて貫入しているのが見られ、噴出した火山岩は概ね輝石安山岩である。

した火山岩類である。これ等の火山岩中には越後側と同様頁岩中に岩床の型式で貫入したものが少くない。彌彦山附近では黒色頁岩の大段丘層中に玢岩が幾枚も岩床となつて貫入しているのが見られ、噴出した火山岩は概ね輝石安山岩である。

山岳としては金北山（一、一七三

米）を主峰とする大佐渡山脈が南北

から北東にのび、弾崎に至つて海に没する。これ等をめぐる多数の段丘

には渓谷が深く刻まれ幼年期の侵蝕

を示している。海岸は特に佐渡の北

西岸が優れ、相川から弾崎に至る直

線距離約四〇糠の間は佐渡を代表す

る景勝地帯で、段丘風景と海蝕風景

とが特徴である。又外海府沿岸に発達

している段丘は高さ二〇糠から八

〇糠に亘る数段あるが、これ等は洪積期の頃、地盤が間歇的に隆起した

ことを示す好資料である。海岸の懸崖は冬期間卓越した季節風「シベリ

アンスーン」が岩石の弱線に沿うて削いた現象で、本地帶の特殊景観を造つたものであり、この間の主な景勝地には尖閣湾・平根崎・関岬・大野亀・二つ亀島等がある。

地溝帯である国中平野は最近の地質時代には海であつたが、隆起して加茂湖が海跡湖として残つたほかは陸化したのである。これが佐渡の語源として狭門(狭い水門)或はアイヌ語のサツト(乾いた沼の意)であるといわれている。佐渡の南西端部小木港附近の延長二〇糠に亘る海岸段丘は高さ二米のプラットホームを呈し、享和二年（一八〇二）十一月十五日の大地震によつて隆起し



タダラ峰とドンデン池 佐渡の山岳で最も興味をそゝぐものはナクサレシヤクナゲの群落がそれを飾つてゐることである。この写真はドンデン池ハムを呈からタダラ峰を望むもので、広々とした天然の芝生は緑取つて見られる。又ここでは放牧馬の遊ぶ様子が群落がみられる。タダラ峰からは両津湾と加茂湖を一望する。

たものである。彌彦地方の海岸も佐渡と同様断層海岸に属し、海蝕崖・洞窟等に富んでおり、その北方の海岸は日本海の典型的な砂丘地帯である。

佐渡は日本海で比較的高緯度にあるから、気候的には概して寒冷地と考えられているが、その半面対島海流（暖流）の影響で案外温暖な気候を示している。従つてこの附近は寒暖両海流の相会するため、植物相も両帯の特徴が交錯した景観を示し、暖帯に属すると考えられるヤブツバキ・シロダモ等の常緑広葉樹も佐渡南部及び彌彦地方では可成多く見られると同時に、北部及び彌彦地方の山地では温帯に属するブナ・カシワ・オヒヨウ・ナナカマド等、落葉広葉樹が支配的である。大佐渡山地北部のシャクナゲ群落、クロビ・キヤラボク等と彌彦北方海岸のクロマツ林とは特色があり、暖帶要素であるマルバシャリソバイが北部海岸に広い面積に亘つて分布しているのは珍らしい。又金北山やタダラ峰等は何れも頂上部に綺麗な芝生、なだらかな起伏、優秀な白山シャクナゲの大群落等を有することが特色であり、殊にドンデン（タダラ峰）附近の天然芝生は広さの点でも他に比類を見ないものである。

動物では、加茂湖附近に棲息するトキと大野川上流に見られるサドマイマイが稀しく、又オオハクチヨウの渡来もある。前者は鶴鷺目朱鷺科の一種であつて、古来本邦の各地へ東部シベリヤから渡來したものであるが、現在では佐渡島だけで蓄養していると

次にこれ等の自然景観を山岳・海岸・湖沼とに分けて局部的に観察しよう。

山 岳—大佐渡山脈は標式的地盤山脈で、東北から西南へかけて約四〇糠に亘り、最大の幅は約一〇糠で、稜線部は概ね平坦な芝地となり、シヤクナゲの群落に被われている。地質は表面が石英粗面岩や安山岩で被われているが、基底は古生層であつて、年期の侵蝕を示している。標高は金北山（一、一七三米）妙見山（一、〇四二米）櫻特山（七八九米）金剛山（九六二米）等であり、ヒバ・スギ等の針葉樹や、蘚苔林となる広葉樹に被われ、其の間浮島のある乙和池や、神代杉を産する山居池や、ドンデン池等の湖沼がある。彌彦、角田山塊は岩の岩玢床を何枚も狭む第三紀層で单斜傾動構造を示している。標高は彌彦山（六三八米）多宝山（六三四米）角田山（四八二米）国上山（三一三米）等で、佐渡島を俯瞰する絶好の展望台となり、彌彦山は彌彦神社のスギの社有林で被われている。

海 岸—外海府の海岸は、何れも古生層や第三紀層の隆起海岸による海蝕段丘風景であつて、その実延長の距離は直距離の約二倍の八三・五糠ある。断崖は大野亀（高距一六六米、延長三〇〇米）押出崎（高距八〇米、延長五五〇米）関岬（高距一〇〇米、延長五五〇米）等であり、段丘は春日崎から関岬にかけて平均高五〇米、最高のものは約一二〇米あつてその最大延長も一・七糠に及んでいる。島嶼として傑出しているのは二ツ亀島（高距六七・三米、周囲一・四糠）でこの外小島や岩礁は三二以上もある。海

蝕台としては広さ約〇・六陌の千畳敷があり、海蝕は大野亀附近、尖閣湾にも見られる。平根崎の甌穴は数の多いと最大のものが直径二米にも及ぶので著名である。小木海岸では有史以後の地震で隆起した高さ二メートル—五メートルの海蝕台地が特徴となつてゐる。又越後側の角田彌彦海岸は断層海岸の海蝕風景であつて、地質は第四紀層と玄武岩が見られる。角田岬附近の断崖は一〇〇メートル—八〇メートルの高距を有し延長は二五〇メートルである。その他高さ二三メートルの立岩があり、海蝕洞も見られるが規模は何れも小さい。

湖 沼—加茂湖は大佐渡、小佐渡間の海が退いて出来た海跡湖で、今は周囲約一七糠、面積四九〇陌最深部八米の潟になつてゐる。従つて塩水魚が棲息し、カキの養殖が盛んでカキ筏五〇〇台が浮んでゐる。又周辺の地はアカマツ林や水田で、広々とした田園風景である。又彌彦地方の角田浜に近い佐瀬はオオハクチヨウの渡来で有名である。

これ等の主要景観地及び舟遊の拠点として小木・相川・尖閣湾・両津・彌彦地区の浦浜等があり、登山・野営には金北山・ドンデン池等、又海水浴には浦浜の海岸が利用される。

佐渡は古來から俚謡と流入の島として廣く知れ渡つており、佐渡おけさ・相川音頭・女彌節等は有名である。又順徳天皇・日野資朝・日蓮等の史実や、区域外ではあるが日蓮三昧堂・真野御陵（順徳天皇火葬塚）国分寺跡・根本寺等の社寺仏閣遺跡等も存在している。彌彦地方にも彌彦神社をはじめとして、良寛で名高い国上寺・五合庵等社寺が多い。